

「長～い苦しみ、一瞬の喜び」そして「ダメでもともと」

私の「医学」と「音楽」の“二足のわらじ”の人生での代表的出来事は、「医学」では、日本病理学会で最も名誉ある「日本病理学賞」の受賞、「音楽」では、オペラ「トゥーランドット」の主役・カラフ王子と、ヨーロッパで録音したCD「誰も寝てはならぬ / 米澤 傑 テノール・オペラアリア集 (G. ステーフアノ指揮・ソフィア国立歌劇場管弦楽団)」の発行です。

私の「座右の銘」は、「座右の銘」といえるような格調高いものではありませんが、「医学」と「音楽」の“二足のわらじ”の人生に共通する“言葉”である『長～い苦しみ、一瞬の喜び』そして『ダメでもともと』です。

「医学」の研究においては、長い長い日数をかけて、データの蓄積や様々な実験を行い、それらを纏めて英文論文を書き、一流医学雑誌に投稿しましても、その医学雑誌が一流であればあるほど(科学雑誌には、いかに他の論文に引用されているか、という勲章のような“Impact Factor”というものがあり、“Impact Factor”が高ければ高いほど一流雑誌です)、編集委員あるいは編集委員が指定した査読者による「査読」までも回せてもらえず「門前払い」で“Reject”されることが多いのですが、幸運にも「査読」まで回ったとしても、査読者から論文内容に対する厳しい批評が寄せられ、データの見直し、実験のやり直し、英文の書き直し・・・等々の「改訂」が求められ、それらを全て改訂して「Revised manuscript (改訂論文)」を再投稿しても、再度、論文の書き直しを求められて再々投稿をするという『長～い苦しみ』を体験した後、やっと「Accept (採用)」という通知を得た瞬間が『一瞬の喜び』です。データの見直し、実験のやり直しや論述英文の書き直しという「論文改訂」という『長～い苦しみ』が長ければ長いほど、そして、その程度が高度であれば高度であるほど、「Accept (採用)」という通知を得た瞬間の『一瞬の喜び』が大きいのです。

「音楽」に関してもまったく同様のことが言えます。「コンサートで歌う」ということが決まった瞬間から、新曲に関しては、譜読みから歌詞の暗記に始まり、オーケストラやピアニストとの“音合わせ”“といった「打ち合わせ」という”難関“が始まります。このホームページの「日本病理学賞とトゥーランドット」にも書かれていますように、オペラ「トゥーランドット」(ベリオ版・日本初演)の公演までの過程がその典型と言えます。

オペラ「トゥーランドット」の開催は2005年の11月の藤沢市民会館でしたが、総監督・畑中良輔、指揮・若杉弘、演出・栗山昌良、という当時の日本最高の布陣でした。そして、私以外の歌手は、全て、二期会のトップスターの方々に、主役のカラフ王子役は、11月20日と26日に、日本を代表するテノール歌手・福井敬さん、11月23日と27日に、私・米澤傑が歌い演じました。その「トゥーランドット」公演の2年前の2003年の秋の夜に、突然、畑中良輔先生から、私の自宅にお電話をいただき、「2年間あげるから、「トゥーランドット」のカラフ王子役の勉強をして、2005年11月の藤沢市民オペラで、カラフ王子役を歌い演じなさい。」とご下命を受けました。あの名曲「誰も寝てはならぬ」を歌える「トゥーランドット」のカラフ王子役は、まさに”憧れ“でした。しかし、”憧れ“だけではオペラ全曲を歌い遠鈴ことは出来ません。早速、ピアノ譜でも厚さが3cmはある「トゥーランドット」全曲の楽譜とCDを購入し、いつも、鞆には、楽譜とCDを入れておき、ちょっとした空き時間も無駄なく利用し、楽譜を眺めながらCDを聴いて、とにかく歌詞とメロディを覚えるという作業に入りました。もちろん、ピアニストでもある家内にも全面協力を頼みまして、ピアノの鍵盤をたたきながら妻に歌ってもらい、まさに“口移し”でメロディを覚えてもらう、ということもしょっちゅうでした。

このホームページの「道中二足のわらじ」の ナポリ公演帰りの機内でのドクターコール（2003 年 12 月）でも取り上げられている、畑中先生からお電話を頂きまして2ヶ月後の2003年12月に、ナポリ市のサン・カルロ歌劇場で開催された「第九のナポリ公演」でテノールソリストを務めました際にも、「第九」に関しましては、全てを暗記できていましたので（これまで、ベートーヴェン「第九」のソリストは100回を超えます）、行き帰りの飛行機の中でも、「第九」そっちのけで、「トゥーランドット」の楽譜読みと暗記をしていました。一応、トゥーランドットの「対訳本」も購入していましたが、それを見るよりも先に、まるで、“お経”を丸覚えするように、イタリア語の歌詞の意味もよく判らないまま、とにかく、「歌詞とメロディ」のまる覚えを行いました。メロディと一緒にあれば、歌詞の意味は判らなくとも、意外と「まる覚え」は出来るものです。カラフ王子が歌う全ての丸覚えを果たしました後、「対訳本」を見て、「ああ、ここはこういう意味か・・・」といったこともしばしばでした。本番直前になって、舞台装置も出来上がって、そこでの「ゲネプロ」の際に、舞台の上に出る「和訳」を見て、「ああ、ここは、こういう意味だったんだ！」ということもしばしばでした・・・主演を演ずる当事者としては呑気過ぎますが。

本番の2005年の11月の4ヶ月前くらいからは、演出家のもとでの「舞台稽古」が始まり、月曜日から金曜日までは、医学部教授としての仕事を行い、土曜日の一番便を使って藤沢へ行き、1泊2日で「舞台稽古」に参加し、日曜日の最終便で鹿児島島に帰り、また、教授職の仕事を行うという“二重生活”が続きまして。いま思い返しましても、まさに“ゾッと“するような4ヶ月間でした。しかし、本番で、見事に、カラフ王子役を歌い演じきり、幾度にもわたる”ブラボーの嵐“とともものカーテンコールの後、幕が降りた舞台上で、演出の栗山昌良先生から「これで、ひとりのテノールスターの誕生だな！」とおっしゃっていただきましたことを、今でも鮮明に覚えています。まさに『長～い苦しみ、一瞬の喜び』の典型例でした。

大学受験の頃からこの『長～い苦しみ、一瞬の喜び』の繰り返しの人生でしたが、『長～い苦しみ』を“苦痛”と感じたことはありません。それは、もう一つの「座右の銘」であり、私の心の根底にいつも流れています『ダメでもともと』という感覚によるものだと感じています。人間「命」さえあれば、何とでもなるものです。

「医学」の研究について書きました医学研究論文にしましても、一流科学雑誌からは「門前払い」で“Reject”となっても、とりあえず、日本の英文医学雑誌に投稿し直して、公にどなたでも見られる状況にさえしておけば、その後、世界中の研究論文に引用されるような大変価値の高い論文になったという経験もあります。いくら一流科学雑誌の査読者であっても全てのことが判っているという訳でもなく、かえって、一流科学雑誌の査読者の既成概念を超えてしますような「新しい発見」であったということになります。『ダメでもともと』精神で、“恥知らず”に徹底して、自分が出した研究成果を信じて、その成果を世界に問うということが肝心です。

(2021年11月10日記)